

開催地名：徳島県勝浦町	
開催日時	令和4年10月22日（土） 19：00 ～ 20：30
開催場所	農村環境改善センター
語り部	京 英次郎 （宮城県仙台市）
参加者	自主防、自治会、消防団、自治体等 46名
開催経緯	本町は内陸部に位置しており、地震における津波災害はなく、その他の大きな災害も経験したことはない。しかし、急激に進む高齢化と人口減少の状況の中で、消防が非常備であるため、いざ災害が発生した時の対応に遅滞をきたす恐れがある。今回は災害を経験した語り部からの講話を拝聴し、今後の防災活動の一助としたい。
内容	<p>（１）はじめに</p> <p>災害は、忘れていても、忘れていなくても、必ず発生するものであり、私たちは避けて通れないものである。人生100年の時代となった現代では、今後皆さんが生活している間に、直接的に災害と向き合わなければならない局面が来るかもしれない。本日は、その時の参考としていただくための話しをしたい。</p> <p>（２）普段から考えることの必要性</p> <p>地震だけでなく、台風や大雨などによる災害についても、普段から備えることが必要である。災害が発生した際には、正常な思考や判断ができなくなる可能性が高い。従って平時から万一の災害に備えた準備をし、災害時にはその備えを基に対応することが大切だ。</p> <p>宮城県沖を震源とする比較的大きな地震が、ここ200年間の間に30～40年スパンで発生していることから、東日本大震災が発生した際に地震の揺れを感じながら、仙台市民の6～8割は「想定していた大きな地震が来たな」と考えたそうである。つまり、仙台市民の6～8割は、普段からある程度大きな地震が発生することを想定し、何らかの準備や備え、心構えができていたということである。津波による被害は予想を超えていたが、地震そのものによる被害が想定以下だったのはそのためだ。</p> <p>地震が起きた時に最優先すべきことは、自身の安全確保だ。地震発生から時間が経過していく中で、優先すべき大切なことは変化していくが、自分の命がなければ家族のことを心配できないし、避難所生活に不安を抱くこともできない。普段から備えること、つまり避難場所や避難時の行動等について、前もって考えておくことが大切である。</p> <p>（３）日常から災害時を意識する</p> <p>地震等の災害発生を予め予想することはできない。従って、いつ発生してもいいように備えることが必要だ。災害が発生して避難所に避難するような場合は、避難所には手ぶらで行くのではなく、最低でも1～2日はしのげる食料等必要な物品を持っていくことが望ましい。震災時に公助が行き届き始めるまで一定の時間がかかるので、それまで自分たちで持ちこたえる必要があるからだ。</p>

3.11を経て、私の日常生活に変化が起こった。食事後に口をぬぐったティッシュペーパーで食器を軽く拭くようになった。また、トイレトペーパーも震災前より節約しての使用を心がけている。例えば、我々は1回あたり大体1.5メートル程度のトイレトペーパーを使用するのが平均的だが、是非皆さんには、今日から20センチほど節約していただきたい。災害時の避難所で使用する簡易トイレは水洗ではないので、拭いた汚物はごみになってしまうからだ。ポケットティッシュも、通常使う量の半分で用が足りる。東日本大震災時、避難所ではトイレトペーパーはもちろんなくなった。日頃の生活の中で節約する意識がないと、いざというとき困ることになる。普段から節約する意識を、生活の中で保持していただきたい。

(4) リーダーのあるべき姿

リーダーは最後まで生き残って、地域の人たちのために、やるべきことを最後までやりきる必要がある。災害現場で救助、消火、救急等の活動をする際の引き際の物差しは、世の中で一番大切な自分の命である。これは危険だと判断したら、まず1回退却して自分の身を守り、体制を整えて出直すべきである。防災のリーダーは、自分で自分の身を徹底して守れなければ活動できない。それを考えないで災害に遭った場合、失敗するリスクが高い。自分を含む、周りの人たちの安全を確保した上での対応が必要である。あくまでも生き残ることがリーダーの鉄則だ。



開催地より

いつ発生するかわからない災害に対して、普段から準備することの大切さを改めて認識することができた。今日のお話を参考にして、自主防災組織、消防団等と連携した防災訓練の実施を検討するとともに、子供や若い人たちへの防災意識啓発を図れるようなイベントの実施についても、今後は積極的に取り組んでいきたい。